
出来なければ僕は死ぬ。

しちか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出来なければ僕は死ぬ。

【Nコード】

N0954Z

【作者名】

しちか

【あらすじ】

始まりを告げるのは、携帯に届く一通のメール。

終わりを告げるのは、それが終わったその瞬間。

人は生きるためなら、死なないためなら、終わりをたくないためなら、最期を迎えたくないなら。

人はあがくのだろうか。

どんなことをしても。

どんなことがあっても。

そのあとに何が待っていたとしても。

差出不明のメール

始まりを告げるのは、携帯に届く一通のメール。

終わりを告げるのは、それが終わったその瞬間。

人は生きるためなら、死なないためなら、終わりたくないためなら、最期を迎えたくないなら。

人はあがくのだろうか。

どんなことをしても。

どんなことがあっても。

そのあとに何が待っていたとしても。

雪はまだ降っていないというのに、肌寒い季節になった。

いや、山の方に住んでいる人の話では、もう雪が降ったとか。

十二月一日。木曜日。

いつもと変わらず、いつも通り、いつものように支度をして、家を出る。

高校に入って初めての冬。

冬なんて、これまでの人生で十六回も経験しているわけだけど。

高校へと進学して、初めての冬は、どこか新鮮味があった。

冬と言っても、景色はさほど変わらない。

変わったのは、木の枝から葉っぱが消えた程度。

そして、思わず体が震えてしまう、この寒さ。

この程度の変化だけだけど、それだけでも、冬が来たことを知るには十分だ。

僕が通う学校への道の前には、軽い坂がある。

軽い、と言っても、歩くのはなかなかしんどい。

傾斜は大きくはない。しかし、距離が長い。

だから、この坂を走ること体力を付けようとする運動部も多数いる。

ゆっくり歩けば問題ない。

けれど、ちょっとだけペースを上げて歩いてみると、少し息が切れる。

そんな坂を、僕はゆっくりと歩いていく。

下駄箱へは十分程。

靴を学校指定の上履きに履き替え、教室へと向かう。

一年生の教室は校舎の三階。一番上。

坂を歩いてきて、多少疲れているというのに、さらに階段を上らなくてはいけない。

正直疲れるが、これをほぼ毎日。

段々と、慣れてはきた。

教室へと入る。

まだ誰も来ていない。

現在時刻は七時半。朝のホームルームが始まるのは八時半。

かなり早く着いてしまったが、いつものこと。

家にいてもしょうがないので、このくらいの時間には、もう学校にしているようにしている。

することはある。

勉強したり、最近買った本を読んだり、最近買ったゲームをした
り。

窓側の一番前の席、自分の席へと座る。

一番前だから、授業中居眠りをしたり、隠れて弁当を食べたりは、
やりにくい。

まあ、したことはないけど。

さて、今日は何をしようか。

授業中、ちょっと分からないことがあったし、勉強でもしよう。

———そう、思った時だった。

携帯に着信が入った。

これはメールか。

こんな朝早くからメールということは、クラスの誰かが、今日の時間割を知りたい、とでもメールしてきたのだろう。

今日は先生の出張の都合で、時間割にちょっとだけ変更があるらしいから。

そう思いながら、携帯を開く。

新着メール一件。

差出人———未記入。

未記入？

何も書かれていない？

たとえ、送られてきたアドレスを知らなくても、そのアドレスは表示されるはずだ。

それなのに……、何も書かれていない。

おかしいと思いながら。

そのメールに恐怖を覚えながら。

開いてはいけない、と、頭では分かっているながら。

僕は、好奇心でそれを開いてしまった。

件名…？1 難易度E

本文…自身の一つ後ろにある机を 蹴れ

いたずら。

——と、思ったかったが、本当にそうか？

差出人が書かれていないメール、これが本当にいたずらか？
怖くなる。

自分は今、夢を見ているんだと思いたくなったが、ちゃんと意識はある。

頬をつねる。痛い。

問題は、このメールの内容。

これを……、やれ、ということか？

誰かがどこから見ているのかと、周りを見る。

教室の扉から顔を出し、廊下を覗く。

他の教室へと入っていく生徒が一人ただけで、他には誰もいない。

その生徒も、廊下を見て十秒くらい経った後に階段から現れたので、その生徒が僕の様子を面白おかしく見ていた、なんてことはおそらくない。

次に、窓から校庭を見渡す。

誰もいない。

監視カメラか何か……は、さすがに考えすぎだ。

高校生のいたずらに、そんな高価な物が使われるとはさすがに考えにくい。

やはりこのメールは、いたずらではない？

たとえば、これに書かれてある内容をやらなければ、なんらかの罰が起こる場合、これが出来るのは、誰もいない今だけ。

やってみよう。

やったところで、そのあと直せば問題はない。

今は、これを（やったらどうなるか）が知りたいのだ。

蹴った。

僕の後ろにあった机は、その後ろの机も巻き込んで、横に倒れた。
——が、何も起こらない。

やっぱりただのいたずらか、そう思った瞬間。

携帯に着信が入る。

メールだ。

急いでメールの内容を確認する。

やはり差出人の名前は未記入。

件名…？1 難易度E

本文…成功

成功？

この成功の意味を深く考えたかったが、机を倒したまま誰かが来たら面倒なので、机を戻す。

戻して少し経った後、電車で通っている生徒が一気に教室へと入ってきた。

最初に戻しておいてよかったと思いながら、授業の準備をして、メールのことなどすっかり忘れ、朝やろうと思っていた勉強の続きを始めた。

予兆

「――さて、この問題の解き方だが」

二時間目、数学。

教師が淡々と授業を進めている。名前は角谷。

僕のクラスは全員で四十人いて、男女比は五・五。男二十人、女二十人。

今日は欠席者がいないため、四十人全員が授業を受けている。

しかし、その中で真面目に授業を受けている者など、僕を含めても十人いるかいなか。

このクラスのほとんどが、授業中に携帯をいじっていたり、隠れて弁当を食べていたりしている。

この時点ですでに問題ではあるが、もっと問題なのは――

「青木……、は、いいか。じゃあ日下。この問題解いてみる」

「えー……。……はい」

――教師が、それを見て見ぬフリをすることだ。

今挙げた問題点、真面目に授業を受けていない生徒の行動というのは、実際すぐ分かる。

教師が授業をする時に立つ教卓からでは、実は丸見えで、僕の位置からでもすぐ分かるのだから、そういう行動というのは大体分かる。

が、教師はそれを注意しない。

いや、教師と言えば、すべての教師を指しているように聞こえるので、前言撤回。

『この学校の』という言葉を文頭に置き、再度。

この学校の教師はそれを注意しない。

角谷が、指名した生徒を途中で変えた理由が。

日下が携帯をいじっていたから、だったら良かったのだが。

青木が携帯をいじっていたから日下に当てた、だから問題なのだ。

と、心の中で思っけていても仕方ない。

結局、心の中で思っけているだけなのだから。

どうせ携帯をいじっけていても何も言われぬのなら、さっきのメールの内容を深く考えていようと思ひ、一応隠しながら携帯を取り出す。

すると、メールが一件来ていた。

誰からだろう、と思ひながら、差出人を見してみる。

「……………っ!!」

差出人が書かれていない。

来た。

急いで本文を確認する。

件名…?2 難易度E

本文…今受けている授業が終わるまでに

教師から指名され

「わかりません」 と 答えろ

なるほど。

つまりは、角谷に当ててもらえるかどうか、ということか。

「わかりません」と答えるのはそれほど難しくはない。

難しいのは、角谷から当ててもらふことだ。

このメールには、『教師から指名され』と書かれてある。

だから、自分から手を挙げて解答するのではなく、教師の方から指名されなくてはいけない。

このクラスは四十人いるから、四十分の一。だけど、しっかり真面目に授業を受けている生徒は僕を含めて十人くらい。

十分の一。いや、今一人当たったから残りは九人で九分の一か。今は十時三十分。授業が終わるのは四十分だから、あと十分で当ててもらわなくてはならない。

だが、四十分の一に比べたら、九分の一はかなり高い確率。勝算はある。

おそらくこれは、「わかりません」と答えることが出来たら成功だと思うけれど、もし、答えることが出来なかった場合、それは失敗ということなのだろうか……。

失敗したら……？

いや、今はそんなことを考えている暇はない。

携帯をしまい、真面目に授業を受ける。

携帯を開いた状態じゃあ、角谷は絶対僕を当てないだろうから。

「————さて……」

実にめんどくさそうな声を出す角谷。

この「さて」は、問題を誰かに答えさせようとしている時の「さて」だ。

あと七分程度。

ここで当ててくれなきゃ時間的にも危ない。

頼む……。当ててくれ。

「……じゃあ……」

言いながら、教室を見渡す。

真面目に受けている生徒を当てようとしているのだろう。なら好都合だ。

来い！！

「次の問題を……、佐々木、解いてみる」

なっ……！！

「え、あ、えっと……」

当てられたのは、真面目に受けている内の一人、佐々木愛華という女子生徒。

僕じゃあ……、ない。

時間はもうないというのに……！

「……すいません、……わかりません」

「えー」

ものすごくがっかりした声を出す角谷。

これはチャンス！

また指名するのめんどくせーという顔で、渋々また教室を見渡す。

「じゃあ……、一条。お前解いてみろ」

来たああああああああああ！！

一条。一条護いちじょうまもるというのが僕の名前。

「はいっ！」

嬉しさのあまり、声も自然と高くなる。

角谷もこの声を聞いて、やっと答えられる奴がいた、とホットしている。

しかし、僕が言わなければいけない答えは、角谷をさらにがっかりさせるであろう。

「わかりませんっ！」

角谷の「お前、自分分かりますよって目でこっち見てたじゃねえか」という絶望した顔に、ちよっただけ罪悪感を覚えた。

件名 .. ? 2
本文 .. 成功
難易度 E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954z/>

出来なければ僕は死ぬ。

2011年12月3日22時48分発行